

〒183-0034 東京都府中市住吉町 4-47-16

Tel/Fax 042-354-3044

E-Mail fuchu_nakagawara_church@hotmail.com

HP <https://www.fuchu-nakagawara-church.com>

牧会書簡／小会だより／

礼拝式文・説教／日々の祈り

2020年6月7日（第十一報）

東京都を含む全国の外出自粛要請が段階的に解除されるなか、当教会は、高齢の方が多い教会の現状に鑑み、なおお休みを継続しています。ここに、6月第一週の礼拝式文・説教原稿および日々の祈りの第十報をお届けしますので、ご確認ください。休止期間以前に行っていた『マタイによる福音書』の連続講解説教の再開はもう少し保留し、主題による聖書講解説教をすることにしました。今回の主題は、「嵐の航海」と「帰還」に関わるものです。

目次

目次

牧会書簡（1 1）敬愛する皆さまへ～主の霊にさえぎられ.....	2
礼拝式文＋説教「主の霊に阻まれた使徒の命の道」（6月7日午前10時30分）	3
日々の祈り「コロナ禍にあって、御手にすべてを委ねつつ」	16

牧会書簡（11）

敬愛する皆さまへ～主の靈にさえぎられたときに、新しい祈りの視座を示されるという真理について

主の御名を讃美いたします。

今回、説教準備の時間を十分にとるために、牧会書簡のいつものような長さでの執筆を断念せざるをえませんでした。皆様お元気でしょうか。主の靈にさえぎられ、わたしたちは今年のいまごろ予定していた事柄をことごとく断念し、新しい人生や時代の画期に足を踏み入れています。いま、教会としても、今後どうするか、誰とともに、誰のために、この地にどのように足をつけて生きていくのか、を真剣に問わなければならない時だと思います。府中市住吉町に再会し、顔を合わせて礼拝をするときまで（まもなくその時だと信じますが）、どうぞ皆様、深いお祈りのうちに、聖靈の導きに委ねつつ歩まれますように。

次頁に、アメリカでのジョージ・フロイド氏の死に衝撃を受ける中で読み返したカロリン・エムケ著『憎しみに抗って 不純なものへの賛歌』（みすず書房、2018年）から、一部を引いてご紹介し、互いに思いをよせることができるとねがいます。トランプ大統領が聖書を利用し批判される文脈で、私たちの立ちどころは、主の愛された命に寄り添う場所にあるといわなければなりません。「今日で終わりにしよう」——だれもが疎外の苦しみを知る今日だからこそ、あらゆる隔てをこえて、私たちは、終わらせるべきものを終わらせ、新しくするべき歩みに踏み出していかねばなりません。そのために、主の風が、すべてを見通す方の靈の確かなみちびきが、私たちには必要です。

2020年6月4日 府中中河原教会 牧師 大石周平

牧会書簡（11）

〔今回のジョージ・フロイド氏の死に先立つ2014年に白人警官に殺されたエリック・ガーナー氏の死去の日の映像に関して〕「……私の心に最も深く突き刺さる、最も辛い場面は、これまで数多く引用されてきた『息ができない』という言葉が発された瞬間ではない。なにより印象に残っているのは、エリック・ガーナーが警官に攻撃を受ける前に、こう言う瞬間だ。『今日で終わりにしよう』。そう言った時のガーナーの声ににじむ絶望だ。『今日で終わりにしよう』——それは、何度も何度も職務質問され、逮捕されることに、もうこれ以上耐えられない人間の言葉だ。不正な存在という役割をもはや受け入れるつもりのない人間の言葉だ。常に屈辱を受け、貶められながら、それをおおらかに受け流せと要求される黒人の役割を、もはや受け入れるつもりのない人間の言葉だ。『今日で終わりにしよう』——ガーナーが終わりにしたいのは、人間を不可視の存在（目にうつっているのに、だれも目にとめない存在）、または不気味な存在へと貶める視線でもある。……エリック・ガーナーのような人間を、たとえその人が手錠をかけられたまま意識を失って地面に倒れていてさえ、危険な存在と見なす視線である。

私がこの場面にこれほど心を動かされるもうひとつの理由は、それが、私がエリック・ガーナーをどんな人間として覚えておきたいかをはっきりさせてくれる場面だからかもしれない。警官たちの下敷きになって倒れている動かない身体としてではなく、死ぬ前に『息ができない』と言った人間としてではなく、『もううんざりだ。今日で終わりにしよう』と言った人間として、異議を唱えた人間として、永遠に続く身分証明と身体検査を終わらせようとした人間として、白人警官の暴力に対して黒人が抱く恐怖の長い歴史を打ち破ろうとした人間として、私はガーナーを覚えておきたい。『息ができない』という言葉には、痛みと死と苦悶の響きがある。そしておそらくはその響きによって、この言葉は合衆国全土にわたる大キャンペーンを巻き起こすことになったのだろう。……

一方、『今日で終わりにしよう』という言葉は、虐待のその瞬間にのみ向けられたものではない。とうの昔に硬直し、蓄積され、組織的に続く黒人の不遇と排斥という人種差別を生み出した、何百年にもわたる憎しみに向けられた言葉だ。『今日で終わりにしよう』という言葉は、古くから続いているというだけの理由で、変えることなどできないと決めつけ、差別の構造を受け入れ、なにもしようとしない怠惰な社会に向けられたものでもある。また、この『今日で終わりにしよう』という言葉で、エリック・ガーナーは彼個人の尊厳を主張してもいる。もはやその尊厳を他人に奪われることをよしとしない個人として。

そして、われわれが守らねばならないのは、この尊厳なのだ。『今日で終わりにしよう』……多くの者が『見過ごされ』、転ばされ、助け起こされることも謝罪を受けることもない社会を生み出す心理構造を。」

カロリン・エムケ著『憎しみに抗って 不純なものへの賛歌』（みすず書房、2018、93-95頁）

牧会書簡（11）

ペンテコステの情熱もそのままに、**6月7日（日）午前10時半**から、主の御霊の導きにしたがい、御名を崇めて礼拝しましょう。礼拝後、できるだけ早く礼拝動画の配信もいたしますので、教会ホームページ上で更新される「最新のお知らせ」をご確認ください。心を高くあげ、今ここに語りかけてくださる主のみことばに、ご一緒に耳を傾けたいと存じます。〔牧師 大石周平〕

招詞 旧約聖書イザヤ書55章3、8～11節

——主の御前に心をしずめ、みことばに聞くことからこの一週をはじめましょう。

「耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。……わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり／わたしの道はあなたたちの道と異なると／主は言われる。天が地を高く超えているように／わたしの道は、あなたたちの道を／わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている。雨も雪も、ひとたび天から降れば／むなくしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ／種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も／むなくしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ／わたしが与えた使命を必ず果たす。」（アーメン）

讃詠 546

——ご一緒に、讃詠546番（『讃美歌』1954年版）を歌い、主の御名をたたえましょう。

**「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主なる神、
昔いまし今いまし、とわにいます主をたたえん。アーメン。」**

祈祷 罪の告白と赦し／聖霊の照明を求める祈り

——全能の神の御前に、私たちの罪を告白し、赦しを求めて祈りましょう。

「全能の父なる神よ、主の御受難を覚えるこの週のはじめに、愛する兄弟姉妹と共に、同じ時に、ひとつのみことばに聴き、祈りをささげる機会を与えてくださることを、感謝いたします。どうか、あなたが親し

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

くこの祈りの共同体の只中にお臨みくださり、聖霊をもって一人ひとりの心を照らし、あなたの義と愛と真とによって満たして下さいますように。

主よ、わたしたちは、みことばに飢え、渇いています。今・ここに、いっそうの不安に揺れる私たちに、語りかけてください。罪のこの世にあって、また、この身にあって、わたしたちは、あなたの御心に反する方向に決定的に傾いており、あなたの命の御言葉によって新たに生きることがないならば、死の陰の谷に転がり落ちてしまうような者たちです。過ぐる一週の歩みの中で重ねてしまった罪を思っても、私たちはあなたの御前に恥じ入り、あなたの一方的な恵みにすがって、赦しを祈り求めるほかありません。私たちは、あなたの招きにもかかわらず、あなた以外の諸力に従い、襲い来る見えない不安に支配されて生きていました。みことばに聴かず、祈ること少なく、ただ自分の思いによって歩み、主なるあなたと隣人へのひたむきな愛に生きることをしなかったのです。

主よ、私は今こそ、ここに、十字架の主をあおぎ、悔いし砕けし心をもって、御前に罪を告白し、弱い私のすべてをあなたにお委ねします。どうか私たちを憐れみ、赦し、癒してください。まことにあなたは、罪びとを招き、失われた者を探し求めて、ついには見出して下さるお方です。御子イエス・キリストをお遣わしになるほどに、世を愛して下さったお方です。御子は十字架上で、あなたの憐れみにみちた救いの御計画を、成し遂げて下さいました。どうか今、御子の十字架の血によって私たちの罪を拭い去り、汚れを洗い清めてください。救いの喜びをもって私たちを満たし、御霊を注いで私たちを聖別し、全世界にいるあなたの子らと共に、感謝をもって御名をほめ讃え、礼拝する者としてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。」

聖書

——聖書に記された神のみことばに聴きましょう。新約聖書ローマの信徒への手紙 15:25-29

「しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあすかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。それで、わたしはこのことを済ませてから、つまり、募金の成果を確実に手渡したのち、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています。」

(アーメン)

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

説教 「主の風にはばまれた使徒の命の道」

いま、私たちの人生の航海に、正確な海図があれば……

人生の航海に、あるいは長老たちと共に責任を負う教会の舵取りに、詳細な航海図と旅程表、さらには予報天気図のようなものがあれば、どれほど良いことでしょう。都や各自治体の外出自粛期間を段階的に終了させるにあたり、具体的な日程まで記載した「予定表」が示されましたが、前回の御手紙に書きましたとおり、教会には感染症対策にあたって独立した判断の余地が残されており、判断が難しいと感じています。町をまたいでの移動を要する会員みなさまのことを思い、なお少なくとも6月7日までの会堂での礼拝休止措置継続を決めたことは、すでにお知らせしているとおりです。同日には、その翌週からの対応について、礼拝をいつもどおりの形で行うかどうかも含め、定期小会での決議をする予定です。

ああ、それにしましても、私たちの人生や、教会もその歩みを共にする社会的な「生」には、船舶安全法で必要不可欠と規定されている「最新の海図」が、「明日の天気」を正確に予見する者らと共に、しばしば欠けているのです。新型コロナ・ウイルスの第二次感染があるのかどうか、先が見えない中での「舵取り」にあたって、私たちは、何よりも、**すべてを予め見通しておられるはずの、主の御霊の導きを、深く祈る**ほかありません（おもえば「摂理」〔PROVIDENCE〕という言葉には、「先に・見る」〔PRO-VIDEO〕という原意がありました。主こそ私たちの正確な「予報師」であるはずだ、ということです）。

使徒パウロの時代の航海

ところでみなさんは、グーグルマップはもちろん、紙の地図も十分でない時代の航海について、考えたことはあるでしょうか。たとえば使徒パウロの船旅における困難について、想像してみたことはありますか。船旅に海図のようなものが必要だと考えた哲学者は、すでに紀元前6世紀頃からいたそうで、かのローマ帝国の時代に至っては、地中海の海岸線把握はそれなりに正確だったそうです（※次頁👉）が、それでも乗り手が「海図」を手に海を渡ったかというその証拠はなく、まして船乗りでもないパウロが、私たちが聖書巻末に見る地図のようなものを、上段から眺めることはできなかったと思われます。

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」



(※) パウロ時代の100年ほど後に書かれた、有名なプトレマイオスの『地理学』には、現存していない地図が付録されていたそうです。次ページの写真は、同書に基づく15世紀のパピルス地図写本。

実際パウロが、何度も難破した経験を述懐していたことを皆さんもご存知でしょう。当時の船旅は、一航海者にとって、どれほど危険を伴うものであったでしょう。それは、しばしば突然の嵐に見舞われ、波と暗闇とにのまれ、船が破壊されたり、同乗者の命が奪われたり、退却や停滞や、進路変更を余儀なくされる旅でした。

得体の知れない海と、死の危険

私たちは現在、エベレスト山をそのままひっくりかえしてもなお深い海淵があることを知っています。その意味で、現代人も、海の深淵の知識では負けません。古代人にとって海はやはり、果てしなく得体の知れない未知の世界でした。

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」



古代の船旅のレリーフをみると（写真^①は、パウロよりもずっと古い、バビロニア時代のものですが）、普通の魚だけでなく、想像上の恐ろしい大蛇か竜のような生物がいたと考えられていたことがわかります。それらのモンスターが、海の底にぽっかりあいた死の国の門番をしている、と考えられていました（ヨナを呑み込んだという「大魚」も、ギリシア語訳では「怪魚」「海のモンスター」を意味する「ケートス」です。ヨナは怪魚さへ従う神の命によって救われましたが……）。

旅は死の危険といつも隣り合わせということでしょう。船乗りたちは空の様子をよくうかがい、できるだけ岸から離れず海岸線を縫うように旅をしまし

た。世の船乗りにはスマホの天気予報もありません。雲行きだけで嵐の到来を予測します。あるいは土地ごとの神や海の神ヤムやポセイドン等諸々の神々に祈りながら、いつ出発できるのか、どの港を目指すかを見極めたのです。

航海にあたって、使徒が「目的」とし、かつ途上の「羅針盤」とした、主イエスの福音

パウロはそんな時代に、やはり自らの信じる神に祈りながら航海をした旅人でした。彼の場合は神々ではなく、ユダヤ人の唯一の神を信じ、神の子イエス・キリストの「使徒」のひとりだと自認しています。「使徒」は——しばらく前に、『新世紀エヴァンゲリオン』という漫画などをとおして、この言葉が若い世代にも知られるようになりましたね——、ギリシア語でアポステル。遣わされた者という意味です。教会に通っておられる方はご存知の方が多いでしょうが、広くインターネットの世界にもこの礼拝は開かれていますから、少しく説明を加えますと、「エヴァンゲリオン」もギリシア語由来で、正確には「イウ・アンゲリオン」。良い・音づれ、美しい・

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

知らせ、すばらしい・使信（メッセージ）という意味で、「福音」と訳されます。パウロはイエスから良い使信「福音」を人々に伝えるように遣わされたという自覚があったのです。

「使徒」は、たとえるなら、負け戦の中奮闘を続ける各地の残された者たちに、戦いは終わったと伝えなさいと、王に言われた伝令です。しかも、彼の使命は異邦人伝道。味方の兵士たちにも人を遣うが、君は敵陣に行って平和が来たことを伝えるように、そう遣わされたという使命感を彼は覚えています。人生をかける目的がなければ、死の危険をとまなう旅など、出るはずがありません。その旅の目的とは、イエスの愛と真に満ちた言葉と行いを隣人に宣べ伝えること。目的は同時に、困難な旅の途中では羅針盤のようなものでもありました。パウロは、道に迷ったときに、自分がしてもらいたいことを人にもしなさい、そうおっしゃって人々のために命を差し出された平和の王の指針を思い出したのです。パウロの人生は、イエスという羅針盤に頼り、その主によって勝ち取られた福音の宣教という目的に向かう、旅そのものでした。

主の霊が……イエスの風が、行く手を阻む

もちろんパウロも、自分なりに計画を練って周到に旅の準備をします。しかし、天候や季節の移り変わりによる海の状態や、国々の動静、新しい出会いなどによって、当初の計画どおりにいかないこともしばしばでした。私はいま、パウロが、計画が狂ったと語るときの様子などを聖書に読んで、時に自分を重ねてしまうのですが、皆さんはいかがでしょう。人生の計画、教会で重ねてきた四か年ごとの計画、おおよそあらゆる領域で、道の変更を余儀なくされたと考えざるをえない。あるいは場合によっては、そもそも旅自体がとん挫しそうだ、そんな経験をしている方の声もきこえてきます。わたしの娘も、よりもよってこのような時に卒業や入学の時期が重なり、多くの行事や予定がとん挫し、影響を受けたものですから、すでに12歳にして、人生が予定どおりにはいかないことを肌身で知っています。この世代の場合はまた、最初の記憶が脳に刻まれる保育園や幼稚園時代に、東日本大震災がもたらした社会的などん詰まりの経験を、出発点にもっています。

ああ、なぜ、よりもよって、この世代なのか、この時期なのか。多くの人が運命の悪戯だとか、生まれた星のせいだということなのです。そんな時にパウロなら、どういでしょう。

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

パウロは、自らの予定がとん挫させられるとき、しばしば、**イエスの「霊」あるいは「風」に行く手を阻まれた**、という表現をしました。運命よりももっと人格的に、神の力をこの身に感じているというニュアンスです。たとえばある時彼は、今のトルコあたり、小アジア一帯を旅するつもりだったのに、ギリシアの方からお呼びがかかって（夢の中ですが）、おもいがけずヨーロッパにまで足を踏み入れなければなりません。ギリシアはまさに神々の世界。そこにあって使徒は、この転機を用意されたのは主だと、**イエスの霊に吹き付けられた**のだということです。ここで「**イエスの霊**」、というのは、何か理解を超えた霊媒師の霊のようなものではなく、彼の人生の船を方向付ける風のような力のことです。

先に、彼の羅針盤はイエスだと言いました。目的地を変えなければならないとき、パウロはそもそも私の人生の目的は何だったかをイエスから真摯に人格的に問われたと感じたのでした。そうすると、むしろ今、大きな目的のためには、こっちの道に大胆に変えるように私は命じられているのだろう、と理解の筋道を整えていくことができます。それほどまでにイエスの風に委ねられるというところに、彼の神信頼、宗教用語でいうところの信仰が現れています。

パンデミックにあって、「主の風」は、どう吹いたか。

ひるがえって私たちの現状ではどうでしょうか。私たちの人生や社会的な活動、そして教会活動を立ち止まらせてきたのは、もちろん言うまでもなく、感染症の原因となるウイルスであり、その媒介となる人間の呼気や関わりです。しかし、私たちもまた、これが単にウイルスの問題に留まらないことに気づかされてきました。ここにはより深いところで、私たちの人生や社会のあり方が起因となった悲惨が横たわっています。そこで、パンデミックは、私たちの生への問い直しの声だと、言うこともできるでしょう。問いを受けて翻ってみれば、私たちの人生の基盤の脆さとか、社会共同体の基盤の弱さの問題があることに気づかされます。脆い生の地盤は、まさに、嵐の海のように無秩序に波打っています。見えない風や、揺れる波に自分たちの向かうべき方向を問われて、思うようにならず、たまらず立ち止まったところで、私たちは、さあ、これからどうするか。新たに判断をしなければなりません。そもそも私たちは、どこに向かうつもりだったのでしょうか。そのために、何を犠牲にしてきたのでしょうか。今、新たな事態にあって、ふたたび最初の一步を踏み出すことがゆるされるなら、どこに進路を向けるべきでしょうか。そしてその旅には、最低限何が必要でしょう。誰がいま、そばにいてくれますか。誰のために、生きていきますか。新しい進路を確認したら、その地にむかうための新しい道具を使うこともできるでしょう。古い航海では思いもよらなかった「ツール」が、新しい旅ではとても有意義だと気付くことも

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

あるかと思えます（そう、私たちは、いまや、紙を資源として大切に扱いつつ、デジタル海図を利用する時代に生きています）。そして、もし、そのように命の本質や共同体の生のあり方を、今回の「嵐の声」が問い直すきっかけを与えてくれたとすれば、信仰者がこの声をより人格的に、「主の風」と呼ぶのは決して不自然なことではありません。

もちろん、病で命を奪われゆく人や、医療従事者の苦勞、経済的に立ち行かなくなる人の不安や苦しみの原因を、安易に神に帰す、というわけではありません。そうではなくて、今回の「主の風」によって、私たちは、本来見据えるべきであった命のはかなさと、それにもかかわらず命に寄り添うべきことを学び、愛と公平を基準にした共同体にのみ力づよさが残されているという希望や、これからの世の中、苦難の時代に、どのような人々の声を聴かなければならないのかという新たな社会的生の規範とヴィジョンを、示されたと思うのです。

私は、誤解をおそれず、**パンデミックにあって、主の風が私たちに吹き付けている**、と申し上げたいと思います。勇気を出してみんなの命のために生活を方向転換し、あなたが傍に居るべき隣人を見出して、助け合う個人の生や社会のあり方を再建してくために、主が今、働きかけてくださったので、私たちは予定をつぶされ、計画を断念させられるのだと考えるのです。

主の風を受けて、開き・広がるヴィジョンについて

さて、苦難の日々にあって、一たび主の霊の力を受けていると確信できたとき、使徒パウロは、勇んで新たな計画に踏み出してゆきました。おもいがけず、ギリシア世界まで来たからには、次の目的はローマだろうか、そうだ、帝国の中心地へ行こう。今やパウロには、世界の都ローマがいやがおうでも目につくのです。帝国の支配領域の正確な地図など持っていない彼ですが、思いは国の境界線を越えるところにまで広がります。もしや神は私に、イスパニアまで行けと言われているのではないだろうか。イスパニアというのは今のスペインあたりでしょうか。当時の世界観で言えば、海の先の西の果てと思われるような地です。そうだ、そちらへ行こう。平和の音づれは、世の果てまで伝えられるべきなのだ。なんでも私たちの現状と重ねることに恣意的になっては危険ですが、私などは、どうしても、今回教会が経験している休止期間中に、おもいがけずインターネットの利用のきっかけが与えられ、オンライン礼拝を通じて教派や国の境さえこえたやり取りが始まっている中で与えられた、宣教領域の広がる夢のようなものと、パウロのヴィジョンを重ねてしまいたくなります。

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

おもえば今日お読みした手紙の一節は、そんな人生の幻を見ていたパウロが、当時の世界そのものとも言ってよい帝国ローマの都にいた人々に宛てて送ったものです。彼はあらかじめ書簡をしたためて、私はあなたたちの所に行きたい、いや、そちらを拠点にして、イスパニアまで行きたいのだ。その目的は、福音のよろこびを分かちあうこと。イエス・キリストがユダヤ人だけでなく、異邦人にも霊の風を吹かせ、イエスを信頼する信仰による救いの道を開いてくださったよろこびの知らせを共有することだと。だから、イスパニアまでそこから私を送り出してくれないだろうか。今日お読みした箇所の前までには、そんな熱い思いがしたためられています。

だが そのヴィジョンもまた、よりもよって「主の風」に阻まれる

ところがです、そんな熱いヴィジョンを示したパウロですが、手紙の最後の最後になって、ちょっとローマ経由のイスパニア行きの旅を中断しなければ……と語り始めます。今日お読みしたところは、そのあたりの事情を告白する箇所です。「**しかし今は……エルサレムに行きま**す」。え、またあの海岸線を縫うようにアジア世界に帰って、異邦人世界ではなくユダヤ世界の中心地、エルサレムに帰って行ってしまったとはどういうことでしょうか。さんざん伝道旅行の使命とグローバルな旅の見取り図を示したパウロが、なぜ今にいたって後ずさりをするのでしょうか。

理由をよく読んでみると、そこでパウロが自分の願いや夢を脇においてでも果たさなければならなかった、もう一つの務めが生まれたことが記されています。実は彼は、エルサレムで貧しい境遇に追いやられているユダヤ人キリスト者を助けるために、異邦人から集めた「肉のもの」つまり義援金を持ち運ぶ仕事を今はすべきと考えたようなのです。それは、良い知らせの伝道旅行と区別するなら、いわば奉仕旅行とでもいうべきつとめでした。

新しい視座を与えられて、しかも、古い地に帰ってゆくべきならば

みなさん、人生には大きなヴィジョンや使命が与えられることもあります。それに従う旅を中断させてでも果たさなければならぬ務めが生じることもあります。しかも自分のためでなく、神の前で、人のために。たとえば、私もよく「人生の羅針盤」として、イエスのたとえ話によれば、大事な礼拝に向かう途上の道端で、倒れている人を見出す場合のようなこと、そういったことが、人生全体のレベルでも起こりうるのです。そのとき、みなさんなら、大事な予定を捨てて、倒れている人の隣人としてそのそばに寄り添うことができるでしょうか。パウロは悩んだでしょうが、貧しい同胞を助けるお金を手ずから届けるために、エルサレムに帰ることを決心し

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

ました。なぜ彼は大事な伝道旅行のヴィジョンがあったのに、他の人を派遣しなかったのでしょうか。それはおそらく、そのお金が、異邦人教会の集めたものだったからです。彼はそのお金を、イエスの愛と真の風がユダヤの地から今やギリシア世界にまで吹き、人々がそれを受け入れたことを、ユダヤ人共同体に示すしるしと考えたのでしょう。今もなおユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の間に見える内壁を、打ち壊すことを、異邦人の使徒としての自分の命を懸けてもよい大きなつとめと考えたのでしょう。

実際エルサレムへの帰途は、新たな命の危険に満ちていました。海が怖いだけではありません。エルサレムはイエス裁判と十字架刑の舞台です。多くの人々が、エルサレム行を決めたパウロの首を腕にだき、泣きながら接吻して送り出したと聖書のある個所にあるのですが、その涙は、パウロが逮捕され、殺されてしまうかもしれないと思ったゆえの涙でした。私などは、震災後の被災地に赴き、そこで命を削るようにしてでも多くの人と助け合う困難なひと時を過ごすことを選んだ方々のことを思い出します。そしてもちろん、コロナの脅威の最前線で闘っている方々や、感染の恐れを覚えつつも子どもたちの命の食を繋ぐために奉仕をしているボランティアの方々、食材をはじめとするネットワークをなお繋いでくださっている宅配業者の方々など、その方々が、感染症の不安を覚えながら、身近なところで歩みを止めておられない姿を思います。

では、教会は、今、どこに向かうべきでしょうか。命に関わる使命が、いま、どこにあるでしょうか。ひとつには、無自覚の感染源とならないために、なおそれぞれの置かれた地に足場をおいて、家族や隣人、地域の方々への福音宣教や奉仕に仕えるときを、新たな思いで続けていく、という可能性があります。一方で、感染を避けたインターネット上の礼拝ではなく、府中の地に、まもなく帰っていくべきだとするならば、そのとき、命の危険がなお完全には消えていない中でこの地で礼拝をし、活動をするにあたっての目的と根拠・私たちの羅針盤は、どこにあるか、しっかり祈り、問う必要もあるでしょう。今日の小会では、そのような点を考慮して、今後のことを話し合いたいと思っています。わたしは個人的には、まだ身体的な命の感染の危機が払しょくされていないゆえに、躊躇を覚えます。しかし、礼拝で顔を合わせて福音を共有する喜びが、それぞれの命に関わることも事実ですから、そのために、みなさんに「府中への帰還」を促す決断もありうるかもしれないとも思います。主の風が何を促している

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

のか、みなさんも今日の会議のためにお祈りください。どちらの決断を教会がとるにしても、それは「主によって与えられた使命」と「命の問題」だということを覚えたいと思います。

なお、府中といえば、最近、教会が建っている住吉町の土木業者を含む地元の数名と、市議会議員との談合について話題になり、私はショックを受けました。オリンピックをきっかけにした街の整備や、新しい公園の増設に、不正があったのですが、これは、また、その他の各地での不正や、政府が関わってきたとみられている不正などを用意に連想させる出来事であり、その分、いまコロナ禍で剥き出しになっている格差や経済的な不平等の問題と切り離せない事件です。いつかはまだ分かりませんが、まもなくこの地にもう一度針路をとって、新しい歩みに踏み出すというのなら、私たちの教会は、誰のために、だれを隣人とするために、戻っていくのでしょうか。もちろん、偏りのある政治的運動に関わろう、と言いたいのではありません。そうではなく、教会における礼拝が、主の使命を明らかにする場だとするならば、だれに福音をつたえるかのヴィジョン、だれに奉仕して生きていくかの方向付けが一層不可欠だと思わされているのです。

いのちをかけた帰還の思いがけない結末

さて、使徒パウロはその後、どうなったのでしょうか。ご存知の方も多いでしょう。やはり、あの帰還は危険でした。すぐにエルサレムでとらえられてしまうのです。ではエルサレムでの奉仕は、そしてその後に果たそうと考えていた、最初の大きなヴィジョンであったローマ行きとヨーロッパ伝道はやはりだめになってしまったのでしょうか。いえ、彼の思いを超えたことでしたが、彼はエルサレムでの奉仕を果たしたのちにとらえられ、そのまま船に乗らされ、嵐の海をこえ、裁判のためにローマに滞在させられることになったのでした。そう、かつて夢みたローマに、思いがけずたどり着くのです。ここにも、主の御計画の計り知れなさ、があります。パウロはその地で、あの手紙の宛先の教会の人々とも出会い、しばらくの喜ばしい祈りの時を共有し、共に過ごすことさえできたのでした。伝承によれば、パウロはローマでイエスのように処刑されてしまいました。しかし、その後に福音が風にのったかのようにイスパニアに広がり、ヨーロッパ世界をとって海をこえ、今この地にも届いていることについては、みなさんが証人と言ってもよいかもしれせん。

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

みなさん、人生のたびにあっては、グーグル先生にたずねてもわからない風を読むべき時があります。そのとき、私は、人生の羅針盤のようなものを持っている人は揺らぐことがないと思います。そして、イエスという羅針盤は、パウロこの方、この 2000 年以上もの間、多くの人々の生涯に、嵐の中で生きる大胆な勇気をあたえ、ついには思いがけない形で、死を超える命の力にあふれさせ、魂を平安に導くものであったことを覚えたいのです。祈りましょう。

祈祷 感謝／執り成しの祈り

全能の父なる神よ、あなたは天と地とその中にあるすべてのものを作り、これを保ち、支え、くすしい御旨（みむね）をもって導いておられます。またあなたは、今もなお私たちのただ中で大いなる御業を行い、キリスト・イエスの救いにあずからせ、あなたの御元に立ち帰った私たちの魂を、聖霊によって満たして、新しい命の希望のうちに生かしてくださいませ。私たちはいと低きものたちですが、あなたの御業を思い、わたしたちに豊かに確かに注がれている慈しみを思い、御名をほめ、心からの感謝をささげます。

神よ、いま新しい局面にあって、ただ十字架の主にすがり、祈りつつ歩み出した私たちの群れを、顧みてください。あなた以外のものに、とくに恐れと不安、不満と高慢に支配されることなく、あなたの御子の救いの真理を常に私たちの目の前に覚えて歩むことをえさせてください。

私たちと同じ困難に直面している近隣の諸教会を、そして全世界にあるあなたの教会の歩みを導いてください。とりわけ日常の生活を奪われた中でささげられる礼拝を、あなたが祝福して下さいますように。主の体なる教会を励まし、あなたが負いやすくして下さるそれぞれの軛を、確かに担うことができますように。あなたの福音をすべての人々に、とりわけ不安のただ中にいる人々に、宣（の）べ伝えさせてください。悲しむ者とともに悲しむ仕え人を、働き人をお遣わし下さい。

主よ、あなたは、私たちすべての者の必要をご存知であり、それを完全に満たして下さるお方です。心身の病に苦しむもの、とくに入院中の姉妹たちを顧み、励まし、支えて下さい。愛するものを失い悲しむ者、多くの悩みのうちにたたずんでいる者みなを慰めてください。貧しさの中で叫ぶ者、飢え渴いて求めるものを満たしてください。争いの渦に巻き込まれているもの、見えない敵と戦う医療従事者、ゆえなく囚われている者、圧迫されて

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

いる者、災害後の痛みを負い続けている者を自由にしてください。重責を担っている者、とくに、国々の代表者、人を裁く立場にある者、子どもたちに教えるつとめをになっている者、宗教者、人の上に立っている者が、あなたに対し、真理に対するおそれをもって、事にあたることができますように。新しい歩を始めようとしている子どもたち、若者たちの成長を見守ってください。年をかさねた者たちをはじめ、すべての者を、あなたにある平安のうちに憩わせてください。

どうか私たちが御手の導きの内においてくださり、今日からはじまるこの一週をあなたにささげ、それぞれの生活の場、それぞれ遣わされた場所であなたに仕える者として歩ませてください。そのうえですべてを、あなたの栄光のもとに照らし、御国の完成に役立ててください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

信仰告白

——ニカイア信条によって、私たちの信仰を言い表しましょう。

「わたしたちは、唯一にして全能の父なる神、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。わたしたちは、唯一の主イエス・キリストを信じます。主は、神のひとり子、すべての世に先立って父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られたのではなく生まれ、父とおなじ本質であり、万物はこの主によって造られました。主は、人間であるわたしたちのため、わたしたちの救いのために天よりくだり、聖霊によっておとめマリアより肉体を受けて人となり、わたしたちのため、ポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、父の右に座しておられます。主は、栄光のうちにふたたび来られ、生きている者と死んだ者とをさばかれます。そのみ国は終わることがありません。わたしたちは、主にしていのちの与え主なる聖霊を信じます。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語られました。また、一つの、聖なる、公同の、使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための唯一の洗礼を告白し、死者の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。」

奉獻と祈祷

——主の恵みに対する私たちの感謝と献身のしるしとして、献げものを献げましょう。

(家庭礼拝で席上献金をなさる場合、教会では、礼拝休止措置が終わった後の最初の礼拝でまとめて受付いたします。維持献金やイースターなどの感謝献金、特別献金も同様になります。)

礼拝式文・説教 「主の霊に阻まれた使徒の命の道」

主の祈り

——（「献金の祈り」に続いて声を合わせて）

「天にまします我らの父よ、願わくは、み名をあがめさせたまえ。み国をきたらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用のかてを、今日も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。」

頌栄

——頌栄 5 3 9 番を歌い、主の栄光の御名を讃えましょう。

「あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。
アーメン。」

派遣と祝福

「平安のうちに行きなさい。希望と喜びのうちに主に仕え、すべての人に愛を伝えなさい。主イエスは世の終わりまであなたがたと共におられます。」

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るよ
うに。アーメン。」

——以上で礼拝を終わります。

日々の祈り 「コロナ禍にあって、御手にすべてを委ねつつ」

教会による「日々の祈り」。今回は後藤俊文長老が「日々の祈り～コロナ禍にあって御手にすべてを委ねつつ」と題して、祈りの言葉をつむいでくださいました。どうぞ、合わせて「主の祈り」を、夕に朝にお祈りください。

愛と憐れみに富みたもう命の与え主なる、主イエス・キリストの父なる御神様、

み名を讃美いたします。あなたは土くれに過ぎないものに息を吹き込み命をお与えくださいました。「**主なる神は、土（アダム）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった**」（創世記 2 : 7）

人は生るのも死ぬるのもあなたの御手の内にあることを覚えます。私達人間はあなたがお与えくださった命を大切に、そしてあなたのお与えくださったタラントにふさわしく生き仕えるよう示されていることを信じます。今私たちはあなたから与えられた命について危機を覚えております。新型コロナという未知のウイルスによるものです。すでに全世界では360万人以上が感染し36万9千人もの方がお亡くなりになっております。海外では感染の勢いが収まってきたとの事でしたが、再開された礼拝において集団感染がおこったとも聞こえてきます。人はすべてを支配できるような浅はかな思い上がりや打ち砕かれ、右往左往して行き先を見通せなくなっているようにも見えます。主よこの迷える羊の群れに真の知恵を与え行き先をお示してください。何を示されているのか、何を聞かなければならないのかあなたに仕える道をお示してください。歴史を振り返るとこのような事象の時にこそ、人の生き方の見直しを迫られ、驕り高ぶりが打ち砕かれ、社会の構造が変えられる節目のようにも見えなくはないと思わされます。今何をなしどう判断するのか真の知恵をお与えくださり道をお示してください。その中にあってあなたがお与えくださった量り目いっぱい仕えている社会と命を守る仕事に携わっている社会システムを支えている者、医療関係者、介護関係者や高齢や病のために弱さを覚えているもの、学校等が再開され感染のリスクが高まる幼い子らに特別の顧みをお与えください。教会がこの社会に在って発すべき言葉と行いをお示してください。

そして召命を受けてみ言葉を宣べ伝えることに仕え多くの困難の中にある群れを牧する者を特別の顧みの内にお置きくださり強めお守りください。どうか驕り高ぶりを打ち砕かれ真の知恵と力を与えられてこの危機を乗り越えさせてください。共に心を合わせて祈りみ名を讃美させてください。この願いばかりの貧しき祈り主イエス・キリストの御名によっておささげします。アーメン。